

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 大乘起信論所説の「真如」の 意義について

### 三 木 和 信

起信論は簡単にいうならば、我々人間生存にとつて、  
真実を求めて生きようとする人々に対して信を起さしめ  
成仏せしめるために説かれたものである。即ち仏を信じ  
て真実の道をたどろうと志す人々のために説かれたとい  
うことができるであろう。真実の道を求め仏より与えら

れた人間の最高の理想を達成しようと努力する人々に、  
その期待する道を正しく歩ますためには、その理想と理  
想達成の方法が明らかに示されなければならない。これ  
を明らかにするものが「起信論」であり、理想とは大乘、  
その方法は起信である。それを八種の因縁によつて示し  
てある。したがつて本論は決して仏教の概論や概説では  
なく、大乘への信を發起せしめて一切衆生の成仏への道  
を明らかにしようとするものである。その意味で本論は  
信心の書というべきであろう。「大乘起信論」という名  
前はこのような立場から解釈され理解されなければなら  
ない。さて、古来この題目については二種の解釈がなさ  
れている。即ち絶待門と相待門とである。いま前者の立  
場で大乘起信を解釈すれば、まず「大」とは「当体を目  
となし、包含を義となす」といわれ、「大」そのものが  
絶待そのものを示すとして、それが真如であるという。  
即ち絶待の法たる真如は三世を貫き十方に徧じ、時間的  
にも空間的にも一切にゆきわたり、凡てを包含して余す  
ところがない。時間的に計量され、空間的に限定される

ものは絶待ではなく、真如の名に価しない。真如は一切に遍満し、しかも具体的に時間や空間の中にあらわれる。しかし限定においてあらわれながら常に無限定である。

例えば春になれば凡ての草木は芽をふき出す。それが宇宙の真理である。真理は春に木が芽をふき出すという事実の中に、具体的に知られるが、真理はその事実のみに限定されない。真如も具体的には事物において認められるが、そのみに限定されるものではない。秋になれば草木に実がなるところにも真理が具現している。真如が真実如常と解釈されるのもこのためである。このような「大」が譬喩的に「乗」といわれる。即ちこのゆくとしていたらない真如こそ人々を生死より涅槃へ運載してゆく力であるからである。そこで「大乘」とは絶待の真如をいうのである。しかも仏道の発趣において、それこそが信じられるべき当のものである。したがって「起信」とは、この所信の境たる真如に対して起す信である。ところが真如法を所信の境とする信とは一体いかなることを用いるのだろうか。真如法は、それが絶待である限り、

一切の差別を絶し言語分別を離れたものでなければならぬ。いかなる限定も加えられないものが真如でなければならぬ。それでは、このような絶待は能信の關係において把握し得ないのである。即ち真如を所信の境、信を能信の心とすることは許されないと武居尚邦氏は述べている。更に信もまた絶待でなければならぬ。信は無差別平等の一心でなければならぬ。したがってこの絶待門に立つときは「大乘起信論」の論は全く無意味とならざるを得ない。といっている。ここにこの題目につ

いて才二の解釈がなされるのである。いま才二の解釈によれば、そこでは「大」とは真如の三大を指すとされる。真如とは言語分別を越えたところに、ことさらに名付けられたものであり、一切の存在が人間の凡ての執着や、そのために起る誤想を離れて、そのありのままの姿であらわれる世界であり、冷煖自知の体験の世界である。古来より、人口に膾炙している有名な「真如とは屏風に描ける松風の音」という歌にあるように、絵に描ける松が風に靡いているのを見て、そこに松風の音を聞くよう

なものであり、単に分別の世界では把握し得ない絶待である。しかしこのような真如を、ことさらに分別の世界で説いて、こゝに三大を示すのである。したがって体とは真如の物柄ということであり、それは実体ではない。

真如そのものは、本来平等、不増不減であり、この平等不増減のところが大きいといわれる。しかしこの体大のままに真如は無量の性功德を具していることを相大という。

もちろん、この相大としての無量の性功德とは迷の染より反顕していわれるのであり、その無量の功德を具したままで平等不増不減の体大であることはいうまでもない。

しかもそれは衆生を開覺せしめる力であり、衆生を生死界より涅槃界へと運搬してゆく力なのである。この点を用大といつたのである。したがってこの真如こそ我々を成仏せしめる力であるから、この点で「乗」とは已乗当乗といわれ、体相を全うした真如の用によつて涅槃を証得し得ることを示したものである。したがってここで「起信」とはこの真如の体相用の三大の義を信ずることを意味している。

以上のことから起信論における真如の意義が如何に重要であるか知り得ると共に、大乘仏教の通申論といわれる地位を占めていることが決して不当でない。いなまさしく大乘形而上学の根本を形成するものがこの「真如」思想であるといわなければならない。

### 青少年育成の為に我々仏教徒に

課せられたる使命と責任、如何を思う

山 内 健

仏教教育は仏教的訓育と仏教教育者の生活態度等を考察しなければならないが、その根本精神は如何なる人に對しても仏教的訓育を施し、陶冶の実を挙げて各自が人格完成の爲の根本動力として、仏教的信念を人々の精神に刻み込み、常に敬虔心を抱いて絶えず自分の生命の淨化に留意する人間を養成して、あわよくば信仰を生活に入らしめんとするに他ならないと思うのである。

而してその教育は、学校、家庭、社会、等如何なる場